

石川 健太・岡村 陽子・大久保 街亜 (2012).
社会不安傾向者の視線方向判断：
表情と解釈バイアス，心理学研究，83, 225-231.

石川 健太

社交不安とは比較的少人数の集団内において、他者からの注目を受ける状況に対して感じる不安のことである。このような状況下で自分が恥をかいたり、顔が赤くなってしまうこと、震えたりしてしまうことを恐れるあまり、回避行動を形成するようになる。このような症状が日常生活を脅かすようになると社交不安障害とも呼ばれるようになる。社交不安は、対人恐怖、赤面恐怖などもこの障害に含まれる。日本では、対人恐怖がより普遍的に認められるため同一のものとされやすいが、対人恐怖は日本人に特有なよく知らない人に対する緊張感に特徴があるものである。それに対して社会恐怖はより普遍的に発症する、他者との接触に対する不安や回避傾向を指すという違いがある。

社交不安についてはこれまで他者の表情や視線に対する注意バイアスの研究や (Greist, 1995; Horley, Williams, Gonsalvez, & Gordon, 2004)、他者の行動や態度に対する解釈バイアスの観点から研究が行われてきた (Amin, Foa, & Coles, 1998; Stopa, & Clark, 2000; Richards, French, Calder, Webb, Fox, & Young, 2002)。これらの研究では、社交不安をもつ人は他者の視線や怒りの表情を脅威であると認識し注意を逸らすこと、あるいは他者の肯定的とも否定的とも捉えることができる態度や行動を否定的に解釈することが示唆された。ただし、解釈バイアスに関しては質問紙法などを用いた研究が中心であり、実験的に刺激を統制することで検討したものは少なく、他者の視線に対して解釈バイアスが生ずるか否か検討されたものは、筆者らが知る限りこれまでにない。

Horley et al. (2004)が示唆するように、社交不安をもつ者にとって、自身に向けられた他者の怒りの視線は脅威である。したがって、脅威である他者の視線から回避行動を形成する (Greist, 1995)。ただし、その一方で、視線からの回避行動は、他者の視線方向を正確に判断することが難しくなると考える。

このような正確な判断が難しい曖昧な状況で、社交不安をもつ者はその状況を否定的に解釈する可能性がある (Amin et al., 1999; Stopa & Clark, 2000; Richards et al, 2002)。そこで我々は、社交不安をもつ者は、曖昧な状況では他者からの脅威が自身に向けられると否定的な判断をするという仮説を立て、これが視線方向判断にも影響すると考えた。この仮説を検証するため、本研究では視線方向判断課題を用いて、社交不安傾向者が他者の視線方向の判断においても、解釈バイアスの影響を受けるか検討した。仮説に基づくと、社交不安をもつ者は解釈バイアスの影響を受ける。そのため脅威である他者の視線が、自身に向けられていると判断すると予測される。

そして、この否定的な判断は正面（0°）からのずれが小さく、正確な判断が難しい曖昧な視線方向において生ずるであろう。そして、真顔と比べ脅威刺激である怒り顔の視線が、こちらに向いていると認知すると予測される。つまり、顔写真の視線方向を正面と判断する割合が高くなると考えられる。

実験の結果、社交不安傾向と表情の交互作用があり、社交不安傾向群では笑い、怒り、中立顔の順で正面判断率が高くなった。また、社交不安傾向群における、視線と表情の交互作用からも示唆されるように、その傾向は特に0°周辺（3-6°）の視線判断が曖昧な条件で顕著であった。一方、統制群においては笑い、中立顔、怒りの順で正面判断率が高くなった。この結果は本研究の仮説を支持する。つまり、社交不安傾向が高い者は中立顔よりも怒り顔について、その視線が自分に向けられていると判断する傾向がある。こうした判断が行われる背景には、脅威が自分自身に向けられているという否定的な解釈が行われていた可能性があると考えられる。本実験ではこれまで検討されてこなかった他者の視線方向と表情といった新たな観点から、社交不安をもつ者の認知メカニズムを検討した。臨床場面においては社交不安をもつ者は“他者から視線を向けられている気がする”と自身の不安を訴えることがある。今回の実験はこうした社交不安をもつ人の報告を実証的証拠をもって支持するものといえるだろう。これまで社交不安をもつ者に対する援助では認知再構成法といった思考における解釈バイアスの修正が行われてきたが、本研究で示唆された視線に対する解釈バイアスのように、知覚刺激に対する修正もまた重要であると考えられる。